『定本與謝野晶子全集』未収録歌考

――「大阪毎日新聞」より――

菊池　真一

与謝野晶子は明治・大正期、「大阪毎日新聞」に千九百余首の歌を寄せている。『定本與謝野晶子全集』は当然これを参照し注記しているのだが、見落としと思われるものが数十首あるので、ここに紹介しておきたい。

一　『定本與謝野晶子全集』にないもの

「大阪毎日新聞」掲載の晶子の歌で『全集』に見出すことのできないものを次の五種類に分けて報告する。

A同時掲載数首の全てが『全集』に掲載されていないもの

B同時掲載数首のうち、幾つかは『全集』に掲載されておらず、その他の幾つかは掲載されていても「大阪毎日新聞」にある旨注記がないもの

C同時掲載数首のうち、幾つかは『全集』に掲載されておらず、その他の幾つかが「大阪毎日新聞」にある旨注記がないものとあるものとに分れるもの

D同時掲載数首のうち、幾つかは『全集』に掲載されておらず、その他の幾つかは「大阪毎日新聞」にある旨注記があるもの

Eその他

A　これは『全集』編者の見落としであると思われる。但し、大正十年の日曜附録の分はたまたま大阪府立中之島図書館蔵のマイクロフィルムにあったもので、編者の責任とはいえない。その他の附録に当れれば、更に晶子の歌が発見されるのではないかと思われる。全十五首。

天涸より燃えひろがりし大火事の火の粉の如き赤とんぼかな
（大毎。明治四十四年九月十四日）
枳殻のはかなき果すら香を立てゝ我を誘へばつまされて泣く
（大毎。明治四十四年九月十四日）
灯の多き明るき夜の大阪に河風吹きて初秋は来ぬ
（大毎。明治四十四年九月十四日）
川口に入り来る船も出る船も血の滴る如き秋の日没
（大毎。明治四十四年九月十四日）
われ恋すされば我あり斯く云ひて尽きぬ命の証にぞする
（大毎。明治四十四年九月十四日）
秋の来て寒げに見ゆる夜会草わが脱ぎし蜻を花に被けん
（大毎。明治四十四年九月十四日）
をちかたの煙の如き薄き山みづ色をする初秋の朝
（大毎。明治四十四年九月十四日）
この悴士地より生れずあなかしこ天より来り天に帰りし
（大毎。大正八年八月三十一日夕刊）
或時のいみじき悴士或時の若き歌人ああフアウストよ
（大毎。大正八年八月三十一日夕刊）
雨なども身に近く吹く風なども物を云ふかな君を泣くかな
（大毎。大正八年八月三十一日夕刊）
（大正四年十月十一日から朝刊・夕刊の別ができた。「大阪毎日」はタイトルの下に発行日を記すが、柱には翌日の日付を表示している。『定本』は柱の日付をとっているが、本稿では発行日を表示した）
一人居て叩けば夜半の木枯の音に似通ふわがピヤノかな
（大毎。大正十年一月二日日曜付録）
紅縞の切を被りて愚なる田舎娘の春の歩み来
（大毎。大正十年一月二日日曜付録）
半いと跨りかにしてその半蓋かしげなるあかつきの空
（大毎。大正十年一月二日日曜付録）
胡地にして木無き黄土を踏む旅の今うちつけに思はるゝかな
（大毎。大正十年七月二十四日日曜付録）
わが手して開くべき戸の多かるに倦みて花咲く岡に眠れり
（大毎。大正十年七月二十四日日曜付録）

B　これも『全集』編者の見落としであると思われる。特に明治四十四年九月二日分は、トルストイ・アルチバセフ受容を示す歌として貴重である。全四十首。

わがけふの解脱に近き境にも見ゆるは母をすててこし家
（大毎。明治四十一年二月十六日）

このうれひいつかきはまるかく思ふわがもつ明日も斬るうつはなし
（大毎。明治四十一年二月十六日）

藤は云ふ君が鼓のひもたらむわれ云ふ君が恋人たらむ
（大毎。明治四十一年四月十一日）

松原に駒のつまおとほのきこゆ高きにのぼり見ましや君を
（大毎。明治四十一年四月十一日）

親の祖の系譜をつくるおもひにて十人ばかりを思ひいでける
（大毎。明治四十一年十二月二十日）

われに似し恋の若人亀の脊を見て龍宮をおもひたくみし
（大毎。明治四十一年十二月二十日）

自らのつなぎしものにあらなくに綱の千筋の中に身はある
（大毎。明治四十一年十二月二十日）

七人の人恋ふことも人一人いつき思はむこともよしとす
（大毎。明治四十一年十二月二十日）

けうらかに横笛ふきしくちびるの紅に似る椿をひらふ
（大毎。明治四十一年十二月二十日）

いらいらと物に抗ふ心さへ薄紙の如ぬれにけるかな
（大毎。明治四十四年七月十七日）

橋のあと牡蠣の附きたる杭なども赤く染まりて日の沈みゆく
（大毎。明治四十四年七月十七日）

わが恋のめでたき事を思ふ時おつる涙もしら玉と知る
（大毎。明治四十四年七月十七日）

しら藤や浜の松間の燈台に覆盃子色の火のともる頃
（大毎。明治四十四年七月二十一日）

われ引かん大むらさきの蝶の羽を三十路女のあこがれの為
（大毎。明治四十四年七月二十一日）

秋を知るかの一葉こそ賢しけれ我は明日をも猶たのむらん
（大毎。明治四十四年八月二十日）

みづからは秋に下葉の黄となりし草のたぐひと思ひなすかな
（大毎。明治四十四年八月二十日）

針とりぬ親ありし日の中の間に街のどよみを聞く心地して
（大毎。明治四十四年八月二十日）

禍もいと重なれば笑ふより身にかなひたる我わざも無し
（大毎。明治四十四年八月二十日）

何なるや醜きものゝ羽ばたきぬ児等が手にある蝉の如くに
（大毎。明治四十四年八月二十日）

夜の長さ年にひとしと歎くこと病みて我知る狂ほしきまで
（大毎。明治四十四年八月二十日）

猶若きアルチバセフよ我が為にサニンの去りし方を教へよ
（大毎。明治四十四年九月二日）

あはれなるアンナカレニナその後に筆を起して我は書かばや
（大毎。明治四十四年九月二日）

物に勝つここちするかな張り詰めし乳をば我児に啣まする時
（大毎。明治四十四年九月二日）

静かなる背筋の色の帳をば後にしたるしら菊の花
（大毎。明治四十四年十月一日）

久しくも京大阪に佛らぬをしら菊さけば歎かるゝかな
（大毎。明治四十四年十月一日）

飽くことを物の終と思ひしに此さびしさも恋のつづきぞ
（大毎。明治四十四年十月二十一日）

灰いろの幕わがまへにひかれたり除かるゝ日のありやあらずや
（大毎。明治四十四年十二月八日）

なほ君をありと思はむなしとして死ぬにまさらむ日をば見んとも
（大毎。大正四年二月二十一日）

初春や魚の頭に井の水をしらじらそゝぐ荘の主人は
（大毎。大正五年三月六日朝刊）

いろ〳〵の花さす瓶をかたはらに見出でざるなり君佛りこよ
（大毎。大正五年四月十日朝刊）

一人居て一重ざくらの散り沈む水のやうなる淡き愁ひす
（大毎。大正五年四月十日朝刊）

君居ずて鬼にさらはれ来しここちわが家ながらなすものかわれ
（大毎。大正五年四月十日朝刊）

恐しき海へわが身を投げおろす風すと歎く朴のちる時
（大毎。大正八年六月十日夕刊）

心をば何の双葉と思へるや弱くあらんかに清しとぞ云ふ
（大毎。大正八年六月十日夕刊）

人一人われに従ふ証をばひなげし立てぬ花の身ながら
（大毎。大正八年八月一日夕刊）

部屋部屋に鮮ましろしいち早く春の光をおくこゝちする
（大毎。大正九年一月一日朝刊）

経巻は紺紙金泥たをやめは更に上なきむらさきを着る
（大毎。大正九年一月二日朝刊）

自らを春の水かと思ふかな小草の原にたゞ一人居て
（大毎。大正九年一月二日朝刊）

わが机山草の葉のかゝりたる柱に近くあてやかに居る
（大毎。大正九年一月三日朝刊）

うら淋し弱げに花の靡く野とおもむき似たる海を目にして
（大毎。大正九年十月一日夕刊）

C　これは『全集』編者のミスかも知れないし、菊池の調査不十分かも知れない。全五首。

小椅の手いとかいだるしすきながら髪の千筋にものを思へば

（大毎。明治四十二年二月十四日）

わが心うすぐらき日に君を見てそのあかるさにうたれてか泣く

（大毎。明治四十二年二月十四日）

川辺より桃咲きつゞく十二町舟酔人は君につれだつ

（大毎。明治四十二年二月十四日）

秋の宵まれに淋しきことも云ふわれかなと云ひやがて笑ひぬ

（大毎。明治四十二年十月十七日）

悲しくも箱根に似たる霧立ちぬ山の渓よりわが心より

（大毎。大正九年六月十六日夕刊）

D　これは菊池の調査不行き届きかも知れないが、今までの所、全集にそれらしき歌を発見できないものである。全四首。

穂薄は終に野沢の波よりも白くめでたくひろごりにけれ

（大毎。大正七年十一月二十八日夕刊）

わが前？（一字不明）皐月の風と薔薇の香と早く少女を酔はしむるかな

（大毎。大正八年六月十六日夕刊）

この心はたかの心騒ぐなりわが涙落ち彼の人の泣く

（大毎。大正八年十月十五日夕刊）

涙おつ紫の蕊のにほひより海を再び見ぬ如くわれ

（大毎。大正九年二月十日夕刊）

E　その他一首。これは寄稿ではなく、内藤千代子が自分の文章の末尾に晶子の歌として引用したものである。

頬に寒き涙伝ふに言葉のみ華やぐ人を忘れたまふな

（大毎。大正二年一月十三日）

二　『定本與謝野晶子全集』にはあるが「大阪毎日新聞」にある旨注記のないもの

人の世ぞ何をなげくとつよくいへど君も少女子われもをとめゴ

（大毎。明治三十三年十月三十一日）

船の足平沙をあゆむ人に似てうめるを思ふ春の日の灘

（大毎。明治四十一年一月二十六日）

起きよと云ふ何れの王ぞこたふらく鶯飼へる御内の少女

（大毎。明治四十一年一月二十六日）

朝の雨さびしうなりぬ紫のからかささして七人去れば

（大毎。明治四十一年一月二十六日）

虚空より黒髪おちぬうぐひすの啼けるうつゝと夢路の中へ

（大毎。明治四十一年二月十四日）

ある人の今日うしなひし淡き恋君にもてきぬたゞそればかり

（大毎。明治四十一年二月十四日）

その馬に一箭を射るはかく問はれ城の姫とぞかたり続ぐわれ

（大毎。明治四十一年二月十六日）

天竺の流沙に行くや春の水浪華のまちを西す南す

（大毎。明治四十一年二月十六日）

もも色とうすむらさきの糸ひきぬ春の光は牡丹の上に

（大毎。明治四十一年二月十六日）

山上の草ほのかなる紫の花さきけらし赤城嶺の雲

（大毎。明治四十一年三月三日）

君こずてさびし三四の灯をうつす柱のもとの円かがみかな

（大毎。明治四十一年四月十一日）

おとろへぬ見よや滝背の千條の楊枝かけける肩もやせにき

（大毎。明治四十一年四月十一日）

石竹の花のやうなる灯を見よと男をよびぬ露台の少女

（大毎。明治四十一年四月十一日）

よしとして土の人形かしづきし幼あそびに何ら変らず

（大毎。明治四十一年五月二十日）

ああ水無月ひるがほの羽蝶の花白し野かぜにふたふたと舞ふ

（大毎。明治四十一年七月一日）

いつはりはわが初恋につきつきし七日しかあれたらざるなくば

（大毎。明治四十一年七月四日）

かの天の鍛冶のつちになりいでしし刃のわれは鞘をはなれぬ

（大毎。明治四十一年七月四日）

かのことを悔ひずやしかり花びらに斑あるがごとし美くしと見る

（大毎。明治四十一年七月八日）

いとわろき集の歌かなこよみせむ人の胸より砂礫をふくと

（大毎。明治四十一年七月八日）

しりながに酒召す人を舞子どもおきて河原にからくりを見る

（大毎。明治四十一年七月三十一日）

夕風や煤のやうなる生もののかはほり飛べる東大寺かな

（大毎。明治四十一年七月三十一日）

しら刃もてわれにも迫りしけはしさの消えゆく人をあはれと思ふ

（大毎。明治四十一年七月三十一日）

朝霧の中をこし子はもの云はず手にうすいろの花おきて去ぬ

（大毎。明治四十一年七月三十一日）

石七つひろへるひまにわが心大人になりぬ石すててゆく

（大毎。明治四十一年一月二十六日）

千の文けぶりとなりし夕よりまた君を恋ふつよくふたたび

（大毎。明治四十一年八月十七日）

こころありて間おきたるおとづれをするにあらねど趣もあり

（大毎。明治四十一年十月一日）

玉に似し人一人あり山村の粟と栗のみくらふが中に

（大毎。明治四十一年十一月二十一日）

いただきの平かなるをたのみつゝ険しとききし心によちぬ

（大毎。明治四十一年十二月二十日）

この君かわれか二人のいづれかに若さをかへせ恋つきぬため

（大毎。明治四十一年十二月二十日）

美くしき小松に春の雪かかるならびが岡の仁和寺の門

（大毎。明治四十二年一月五日）

人の云ふごとき敵とは思はねどわれをたたへに彼のこぬゆゑ

（大毎。明治四十二年二月十四日）

龍の画をよしと云へるとおそろしと泣きける人とめぐり逢ひにき

（大毎。明治四十二年五月一日）

上はみな雨霧たちぬ沙羅ちりし白き花びら見つゝ道ゆく

（大毎。明治四十二年七月三日）

わが墓もいさゝさか高く盛りたまへ君とありけむ窓を見るべく

（大毎。明治四十二年七月三日）

腹立ちて父のいとよくたゝきたるこの女子を君もたゝきぬ

（大毎。明治四十二年七月十八日）

妬ましき思ひ出ばかりとりいづるものぎたなかる心となりぬ

（大毎。明治四十二年七月二十一日）

恋人は朝を夜とし保つこと二時にして今とばり引く

（大毎。明治四十二年十月十三日）

ようききぬものを思へば鼻尖るなおもひそとわがいさめしことを

（大毎。明治四十二年十月十三日）

女子は千筋の毛にもしむものか秋としなればさびしげにして

（大毎。明治四十二年十月十七日）

わが背子はわが知らぬ時緋なる小さき扇をもてあそぶてふ

（大毎。明治四十二年十月十七日）

草中に漁き雁来紅のあるよりもその夜おのれは華めきしかな

（大毎。明治四十二年十月二十日）

円頂の十八大師わが罪をなだめますとも許るとおもはめや

（大毎。明治四十二年十月二十九日）

わが家に春は来らず雪きたる古りし簾を下したるまゝ

（大毎。明治四十三年一月九日）

安らかにたばかられこし身をいはふ心なんどもめづらしきかな

（大毎。明治四十三年二月七日）

白牡丹白木蓮とこの君を冷やかなりといまだ思はず

（大毎。明治四十三年二月七日）

わが心いとあわただし妬まじと美くしげなるいらへせし後

（大毎。明治四十三年六月十八日）

聞く時に君も涙のおちぬべき昔がたりを多くもつかな

（大毎。明治四十三年七月十日）

なつかしき紺のゝれんに撫でられしふり分髪も老いにけるかな

（大毎。明治四十三年十一月三日）

三栄の帯の太鼓の下に見る足袋のはしより秋立ちにけり

（大毎。明治四十三年十一月五日）

さるほどに三十路を過ぎて知りけるはひしと此世に執すべきこと

（大毎。明治四十四年三月十七日）

わが脊子が啣へて過ぎし葉巻の香廊に（？）いざよふ春の夕ぐれ

（大毎。明治四十四年四月二日）

わが落す背き涙を見る如く桜にかか（？）るたそがれの月

（大毎。明治四十四年四月二日）

春かぜに帳を挙げて見出せば背柳のごと髪のひろがる

（大毎。明治四十四年四月二日）

乾きたる砂に埋まり二三点花のしぼめる月見草かな

（大毎。明治四十四年六月二十二日）

大きなる百合の落つるはなまめかし我の若さの去るに比べて

（大毎。明治四十四年七月八日）

洞穴の暗さを思ふ廻廊に灯一つとぼり湯のにほひする

（大毎。明治四十四年七月八日）

あぢきなく石につまづく心地して俄に切れし三味の絃かな

（大毎。明治四十四年七月八日）

ゆたかにも汲み干し難きわが涙わく湯の如く恋に流るゝ

（大毎。明治四十四年七月八日）

人妻の三十路女のわが如く狎れやすからぬ夜会草かな

（大毎。明治四十四年七月八日）

霰より疾く羽より軽やかに心をわたる淡きかなしみ

（大毎。明治四十四年七月八日）

ふきあげの盤よりなびく水の音静なるこそ悲しかりけれ

（大毎。明治四十四年七月八日）

鵠の鳥かき消す如く立ち去れば小波もなき黄昏の海

（大毎。明治四十四年七月八日）

ほとばかり沼の底にて息をつく悲しき身かと昼も暁く

（大毎。明治四十四年七月八日）

蓑をきて図書館前の大河を船人のぼる水無月の雨

（大毎。明治四十四年七月八日）

はづかしき舞台の上の恋の如知るに任せつ観るに任せつ

（大毎。明治四十四年七月十七日）

狂はしき黒髪をもて絡みたる心の巣より紅き鳥鳴く

（大毎。明治四十四年七月十七日）

微くさき衣桁の衣を被くとき雨を憎みぬ継母の如

（大毎。明治四十四年七月二十一日）

川口を夜明に出づる大船も霧をば歎くわれは逢瀬を

（大毎。明治四十四年七月二十一日）

七尺の簾を透きて白百合のそよぐ夕にわたるいなづま

（大毎。明治四十四年七月二十一日）

足らぬこと無しと知れども涙おつうらはかなさや病ならまし

（大毎。明治四十四年八月二十日）

みづ色の朝顔に似て板敷の光沢にうつれるわが袂かな

（大毎。明治四十四年八月二十日）

物書けば心たかぶる日ぞつゞく我事は皆言ひて已みなん

（大毎。明治四十四年八月二十日）

大いなるツアラツストラの蔑みし女の中に我も在るかな

（大毎。明治四十四年九月二日）

驚きて黒き瞳をわれ見はるツアラツストラに耳を貸しつつ

（大毎。明治四十四年九月二日）

金の蛇ここちよきかな身を咬みぬツアラツストラの杖を離れて

（大毎。明治四十四年九月二日）

大空に遊ぶが如く折折に虚無に羽打てば健きかなわれ

（大毎。明治四十四年九月二日）

こすもすと赤きだりあと雨に濡る乱れしままに刈らぬ草むら

（大毎。明治四十四年十月一日）

歯を病みて心いらるゝ秋の日にわが待てる子の帰り来ぬかな

（大毎。明治四十四年十月一日）

大いなる鬱金のひと葉日に透きて散る時われも舞はまほしけれ

（大毎。明治四十四年十月二十一日）

何も皆いま思ふべし今日取らん千年を待ちて悔いざるは誰

（大毎。明治四十四年十月二十一日）

東大寺二王の門を静かなるうす墨色にぬらす秋雨

（大毎。明治四十四年十月二十一日）

いにしへの和泉式部は知らねども歌書くを知る恋のあまりに

（大毎。明治四十四年十月二十一日）

ひとり寝は誰も夜寒の身に沁むを我おなじくは寝ずて思はん

（大毎。明治四十四年十月二十九日）

十歳の子と一人の母とたぐひなくたのみかはすも君あらぬため

（大毎。明治四十四年十二月八日）

御心のあやしきすさびこの人を一人泣かせて海わたり行く

（大毎。明治四十四年十二月八日）

思ふとも恋ふとも云はじ見がたかるこのあこがれに髪焼くるとも

（大毎。明治四十四年十二月八日）

筆とればまたわが心やるせなく騒ぎそめたり文かゝで寝む

（大毎。明治四十四年十二月八日）

君語る生れながらにめしひなる童子にものを教ふる如く

（大毎。大正元年十二月二十二日）

その日より生命のはてに及ぶべき恋と思ひき死にけむわれ

（大毎。大正三年七月十九日）

あはれにも心の隅に置きわびし往時の日の一つの思ひ

（大毎。大正三年七月十九日）

木の下に雨を覗けりわが爪の色のやうなる昼顔の花

（大毎。大正三年七月十九日）

誰も皆これの絵巻に金をおく君と思へり軽はずみにも

（大毎。大正三年七月十九日）

うるほふと身に近きもの知りし時まことは深き水底にぬぬ

（大毎。大正四年二月二十一日）

思ひきや棄てつる人といふ如き通俗の名を君に負はんと

（大毎。大正四年二月二十一日）

初恋といやはての恋そのなかにわが影少しほのめきぬべし

（大毎。大正四年二月二十一日）

この荘は一昨日の客昨夜の客貧子にあぶれ春風をめづ

（大毎。大正五年三月六日朝刊）

その夕洗ひし髪も乾きぬとひとりごつ日の幾日続くぞ

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

哀れにも狙ふがごとく遠方の人の心を見てあるこころ

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

かたはらにあれども夫は隠れ簑被てありとしてかつ淋しけれ

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

午前の雨も晴れたる夕方の入日もさびし君西にゐて

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

なほ七日君かへらずと灯にかこち机に語りわびしらに居ぬ

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

人よりも母のつとめを知れるごと振舞ふは誰君あらぬ日に

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

かりそめに旅して寝ると夜などを安らかに居む夢は見むとも

（大毎。大正五年四月十日朝刊）

築地なる蔵の陰なる船着場その穴くぐり熊狸出づ

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

正月は築地の橋を四つ五つ越えしとのみに外のことなし

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

ものゝ木の枝のみ多きここちするわが一月の山の手の街

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

人間の力も尽くと云ふ時に微笑おこるわが病これ

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

恋と云ふ広き境に行くことをわれの惑ひて来し所らし

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

春の日のみどりの草の色などを恋かと見つる若きいにしへ

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

誇るにはあらねどものに泥みしは僅かに君を思ふことのみ

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

若き日に返らんことを願はざり唯だ若さをば之に加へよ

（大毎。大正六年二月十二日朝刊）

大きなる価あるもの心より崩れて落ちも行くごときかな

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

うす紅の若き心に背の縁とりぬと今日もかしこみぬわれ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

灰色もよしと思ひぬきよらにも華めくものゝ影なればこれ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

おほらかにうす紅のかたまりと春はわが身も思はるるかな

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

いづくにか町の娘の淋しやと息つく如き春の夕かぜ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

幸の欠目をなせる傷かこれ否いますこし大きやかなり

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

落日をさくらんぼとも侮りてわれ口づけを思ひけるかな

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

云はぬをば酒にも勝り身のうちに沁む酔として君を思ひぬ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

春の日に冬の統きて来るとも驚かじなど云へば身慄ふ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

わが胸に白鳥ほどの花咲くと身をやごとなく思ふ日となる

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

百年も千年もはた忘れ居よよそ人として愛でんばかりぞ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

赤土の椰子の実ほどのかたまりの四五日ありぬ春の門ぐち

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

わにざめが海に寝るより自らの深く沈める世の中の底

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

目に見ゆるものに足らずと知りにけむ見るべきものを足らずとすらむ

（大毎。大正六年二月二十六日朝刊）

天地は秋より何につづくとも思はず朝の心地よきかな

（大毎。大正六年十一月二十日夕刊）

机なる裸人形いかがせんわが亡きのちの子と見ゆるかな

（大毎。大正八年四月二日夕刊）

幻術師二人向ひてある時は春秋もなし天も地もなし

（大毎。大正八年六月十日夕刊）

夏の雲くづれておちし白の罌粟日の片はしの紅の罌粟

（大毎。大正八年八月一日夕刊）

よそ目には旺んなること太陽をしのぐと知らぬ向日葵の花

（大毎。大正八年八月一日夕刊）

秋の風竹の柱に黄金を一筋引けるもとに居て聞く

（大毎。大正八年十一月三日夕刊）

もろこしの畑の中をば肩すぼめ逢ひに来りしこほろぎの鳴く

（大毎。大正八年十二月二十六日夕刊）

初春は男も清し松と云ふこちたき枝もにほやかに見ゆ

（大毎。大正九年一月一日朝刊）

雀らがあみ笠被たる早春の牡丹をのぞく小さき足おと

（大毎。大正九年一月一日朝刊）

いと小き筍めきし塔にある閻浮檀金の福寿草かな

（大毎。大正九年一月二日朝刊）

わが心五彩の色のほの浮きぬ春のものともなりにけらしな

（大毎。大正九年一月三日朝刊）

美しくおのれの儘に生ひいでし野馬の声する初春のかぜ

（大毎。大正九年一月三日朝刊）

沼に居て流れぬ水に勝るなり稀に怨みを人の来てきく

（大毎。大正九年一月十四日夕刊）

山楓はた柏木の背に似る旅の愁ひと思ひけるかな

（大毎。大正九年六月十六日夕刊）

目の前に蘭陵王を舞ふとんぼいみじく清く日の暮れて行く

（大毎。大正九年十月一日夕刊）

あわつけくおのれともなく地に落ちし風を見るかな花草の中

（大毎。大正九年十月一日夕刊）

窓々を秋の愁のな入りそと閉ぢつることも消息に書く

（大毎。大正十年一月十九日夕刊）

雲なども来て靡くかと広やかに高く淋しく見ゆる家かな

（大毎。大正十年二月二十五日夕刊）

しろがねの波を捲かんと心地よく網投ぐるなり秋の男は

（大毎。大正十年二月二十五日夕刊）

一瞬に八千載のよろこびを知る力のみ滅びず今日も

（大毎。大正十年六月二日夕刊）

美しきまことの媚をわれのみす天地と云ふ恋人の前

（大毎。大正十年六月二日夕刊）

われの見て衆人あまりはかなけれ中の二三はめでたきに過ぐ

（大毎。大正十年六月二日夕刊）

貧しさの極りなさと服したる不死の薬は別やうのこと

（大毎。大正十年八月十九日夕刊）

身の半劫火にまかれ寂光の世界を見るも恋の不思議ぞ

（大毎。大正十年八月十九日夕刊）

紫の墨しみ入りてわがこゝろ淋し銀糸の紋を縫はまし

（大毎。大正十年九月一日夕刊）

手に取れば恋しき人を見んとする心のすゝむ白菊の花

自らを勝れしものと覚え初め滅びに逢はん力蓄ふ
（大毎。大正十年九月一日夕刊）

（大毎。大正十年九月十五日夕刊）
元日や人のいみじき文集の表紙に手をばおくこゝちする
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

ささめきて松立てに来しその日よりたゞにもあらず春を思ひし
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

正月の日のほのかなる暖かさ真白き梅を抱く如きかな
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

降る雪の音も聞くまでしづかなる元日こそはめでたかりけれ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

つぎつぎに九つの雛松立てし鶏舎の口より出づるめでたさ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

旅衣よそほひし人例のごと出よと促す元日のあさ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

春となり年改まりわが上のつゆ変らねば旅に出で立つ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

うち日さす都の道の元朝に踏みてこれよりわれ旅に出づ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

正月を旅に出で立ついづ方も皆蓬莱と思ひなしつゝ
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

待しておのれの子等の書くことよ王の正月少年の春
（大毎。大正十五年一月三十一日朝刊）

付記

平成九年一月発行の「中野書店古書目録　第五二号・近代文学特集」一七五番に「与謝野晶子歌稿」があった。同目録二五頁には、

四百字詰原稿用紙　毛筆二〇枚・ペン書三二枚　合綴一冊

とあり、その後に、

用紙一枚ごとに五首収録、各々に晶子の署名がある。ただし巻末の五枚は他筆のようで、その最初に茅野雅子の、また最後の一枚は晶子の署名がある。粗末な半紙の表紙に「晶子女史自筆歌集」と毛筆の題が書してあるが、旧蔵者は不明。

とある。

同目録一四頁には最初の部分の写真が掲載してあり、三首が読み取れる。これは明治四十二年三月八日発行の「大阪毎日新聞」四面に掲載の晶子の歌五首のうちの最初の三首と殆ど同じである。違っているのは振り仮名部分の仮名遣い二ヶ所のみである。残り二首についても、裏映りの幽かな文字ながら前記新聞の残りの歌と同じものと推定される。

このことから、この「中野書店古書目録」掲載の「与謝野晶子歌稿」の最初の一枚は、与謝野晶子が大阪毎日新聞社に書き送ったものと推測される。この推測が正しいとすれば、次のことが分かる。

一、晶子は、明治四十二年三月当時、四百字詰原稿用紙に毛筆書きで歌稿を送っていた。

一、晶子は、歌に自ら総ルビを振っていた。

一、新聞掲載の際には、振り仮名については、完全に晶子の歌稿通りの仮名遣いで活字化された訳ではない。

前記第三点から思い起されるのは、「大阪毎日新聞」大正七年二月六日夕刊六面掲載の晶子の歌三首が、二月十七日夕刊一面に再掲載されたことである。一日違いとかいうのならば誤って再掲載したとも考えられるが、これは間隔が空きすぎる。よく見ると第三番目の歌の「白樺」の振り仮名が、六日は「しろかば」、十七日は「しらかば」となっている。仮名遣いというよりは振り仮名の誤植に晶子が抗議し、訂正再掲載されたのではないかと密かに考えている。

この目録掲載の歌稿には、恐らく大阪毎日新聞社宛に送ったものが多数含まれているだろうと思われるが、現物を見ていないので、これ以上はコメントのしようがない。

本稿を成すにあたり、山根賢吉先生の御教示・御指導を賜った。御礼申し上げる。